

## 情動の評価面と動機面はどう関係するか

氏名 信原 幸弘

所属 東京大学

情動は世界の価値的なあり方を表象するとともに、何らかの行動を動機づける。たとえば、ヘビに対する恐怖はヘビを危険だと評価するとともに、ヘビから逃げる行動（場合によってはヘビに立ち向かう行動）を動機づける。情動の評価面と動機面の間には、適合関係、すなわち動機のあり方（逃走の動機づけ）が評価の内容（危険）に「相応しい」という関係が成立するように思われる。

しかしながら、プリンツは情動の評価面と動機面をかなり独立したものと捉える。すなわち、基本情動から派生情動が形成される仕方として、基本情動の評価面が変化せずに動機面だけが変化すること（「身体の習慣」の獲得）や、動機面が変化せずに評価面だけが変化すること（「再校正」）があるとプリンツは考える。たとえば、笑いという基本情動（それが基本情動だとして）はコメディのような可笑しいものを見て声に出して笑うというような情動であるが、声や笑顔を抑制した笑いの情動はそのような基本情動の笑いから派生したものとみなされる。そしてこのとき、基本情動の笑いにおける身体変化は派生情動における身体変化と異なっており、身体変化は行動の準備（それゆえ行動の動機づけ）なので、この二つの笑いは動機面が異なることになる（それゆえ声や表情のあり方が異なる）。しかし、それらはともに可笑しいという価値的なあり方を表すので、評価面は変わらない。このように評価面が変化せずに、動機面だけが変化することがある。

また、シャーデンフロイデという情動は、他人の不幸が自分の目的にかなっていることに喜びを感じるということから派生した情動であるが、それは喜びと同じ身体変化（それゆえ同じ動機づけ）をもちつつも、喜びとは異なる評価内容をもつ。すなわち、シャーデンフロイデは他人が不幸であることを表象するのにたいし、喜びは他人の不幸が自分の目的にかなっていることを表象する。このように動機面が変化せずに、評価面が変化することがある。

なお、情動の動機面の一つの側面として情動価（＝感情価）がある。情動には喜びのような正の情動と悲しみのような負の情動があり、正の情動は好ましく、負の情動はそうでない。プリンツは情動を内的強化子として捉え、情動がそれ自身を生じさせる行動を促進するものである場合、それを正の内的強化子とよび、情動がそれ自身を生じさせない行動を促進するものである場合、それを負の内的強化子とよぶ。そして正の情動は正の内的強化子であり、負の情動は負の内的強化子であると捉える。内的強化子の正負は情動の動機面の正負とみなすことができるから、情動価の正負は結局、動機面の正負ということになる。そしてプリンツは情動の評価面と情動価を独立だとみなす。つまり、情動が正と負のどちらの価値的なあり方を表象するかということと、情動が正負のどちらの情動価をもつかということは独立だというわけである。ここにも、情動の評価面と動機面を独立だと見るプリンツの見方が現れている。

このようなプリンツの見方に対して、情動の動機面が評価面に対して適合関係をも

つという見方を擁護することを試みる。